SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

さよなら、ベルリン
またはファビアンの選択について

2021年／ドイツ映画
配給：ムヴィオラ／178分

2022（令和4）年6月20日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２２－７４

監督：ドミニク・グラフ
原作：エーリヒ・ケストナー『ファビアン　あるモラリストの物語』
出演：トム・シリング／ザスキア・ローゼンダール／アルブレヒト・シューフ／メレット・ベッカー／ペトラ・カルクチュケ／ミヒャエン・ヴィッテンボルン

みどころ

１９３１年、ワイマール体制下のドイツは、ヒトラーの抬頭と第２次世界大戦の前夜。そんな不安な時代を生きる作家志望の青年ファビアンの選択は？

秦の始皇帝が行った「焚書坑儒」と同じことがナチスドイツでも行われ、本作の原作はそのターゲットにされたが、それはなぜ？ウクライナ戦争が長期化し、第３次世界大戦の予感までささやかれている今、本作は必見！

どこへ歩き出せばいい？その答えは誰にもわからないが、９０年前の小説が「今この世界」の映画になったのだから、今を生きる若者たちは、本作を観てしっかりそれを考えなければ！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪▫■178分の名作だが、原作は？著者は？原題は？監督は？■▫▪

本作は１７８分の長尺だが、２０２１年ドイツ映画賞で最多１０部門ノミネートされ、主要３部門を受賞した名作らしい。また、１９５２年ミュンヘン生まれのドミニク・グラフ監督は有名だし、原作は『飛ぶ教室』等で知られる児童文学の大家エーリヒ・ケストナー唯一の大人向け長編小説にして最高傑作の『ファビアン　あるモラリストの物語』だ。

監督インタビューによると、映画の原題である「Fabian」についている副題は「Going to the Dogs」で、それは「破滅していく」という意味らしい。中国ではじめての統一国家、秦を築いた始皇帝は「焚書坑儒」という暴挙を行ったが、それと同じことを、中国では文化大革命の時代に、ドイツではナチスの時代に行っている。本作ラストには、それを象徴する印象的なシーンが登場するが、そこで燃やされていた多くの本の中の１冊が『ファビアン　あるモラリストの物語』だったらしい。

日本でも満州事変から太平洋戦争に向かう時代に思想統制が進み、プロレタリア文学はもとより、自由主義的風潮の書物はすべて弾圧されたが、ナチスドイツの時代でもそれは

同じだったわけだ。そんな中でもケストナーは自由主義・民主主義を擁護し、ファシズムを非難したため、第２次大戦中には執筆禁止となったが、亡命をしないまま終戦を迎えたらしい。そして、戦後は初代西ドイツペンクラブ会長としてドイツ文壇の中心的人物となり、ナチスを復活させないための平和運動にも尽力し続けたそうだ。

そんな原作を、ドミニク・グラフ監督が１７８分の大作にまとめた本作は、こりゃ必見！

■□■焦点は、２０２２年の今VS１９３１年のドイツ！■□■

２０２２年2月２４日のロシアによるクライナ侵攻は、プーチン大統領の主張によれば「ウクライナ東部のナチ化を防ぐため」だから、ビックリ。１９４５年の第２次世界大戦の終了から８０年近く経った今、核兵器使用を含む第３次世界大戦の危険が一部で語られているが、２０２２年の今は、ナチズムの足跡が聞こえていた１９３１年当時のドイツとよく似ているの？ちなみに、ベルリンでの五輪はボイコットされることなく１９３６年に開催され、ナチスドイツの国威発揚に有効活用された。他方、新型コロナウイルスというパンデミック騒動の中でも、２０２１年の東京での夏季五輪に続いて、２０２２年2月には北京での冬季五輪が開催されたが、そこでの中国の国威発揚ぶりは？戦後、憲法９条に守られ続けた日本も、ウクライナ戦争を契機として、やっと安全保障や憲法改正の動きが現実化しているが、さて？

本作冒頭は、地下鉄の駅をカメラが追っていくもの。列車の数は地下鉄御堂筋線ほど多くはないが、ここは現代のベルリン近くにあるハイデルベルガー・プラッツ駅らしい。アーチ状の天井の美しさは“さすがドイツ”と感心させられるが、ここ数年、大阪市が精力的に進めてきたエレベーターや公衆トイレの設置は見受けられない。多分、これは便利さより伝統を重んじるドイツの国民性だろう。そんなこと考えながらスクリーンを見ていたが、男が階段を上がると、なぜかそこは１９３０年代初頭、ワイマール共和国時代のドイツに！そして、先の戦争（第１次世界大戦）で顔面を破壊された男が主人公のファビアン（トム・シリング）に話しかけてくるが、そのセリフは・・・？

■□■作家を目指すも、この自堕落さは！親友は？恋人は？■□■

本作冒頭の舞台は、１９３１年のベルリン。ファビアンは作家を目指して故郷ドレスデンからベルリンにやってきたものの、今はタバコ会社のコピーライターとして働く日々だ。もっとも、３２歳のファビアンは、夜な夜な親友のラブーデ（アルブレヒト・シューフ）と共に、芸術家たちの溜まり場や売春宿が立ち並ぶ界隈をさまよい歩いていたし、その費用はすべて裕福な家庭の息子であるラブーデが負担していたようだから、ノープロブレム？いやいや、意外にそうではなく、ファビアンは不安な時代状況の中、不安な心理状態のまま悶々とした毎日を送っていたらしい。不安な時代には怪しげなクラブが流行るもの。しかして、ファビアンがある夜、怪しげなクラブで出会ったイレーネ・モル（メレット・ベッカー）という女性に連れられて、彼女の屋敷の中に入ってみると・・・？

ベルリンは「欧州の没落」に溢れているらしい。本作導入部では、ドミニク・グラフ監

督がニュース映像や８ミリ映像などを交えた画面で演出するワイマール共和国時代特有の（？）ドイツ（ベルリン）に生きるファビアンやラブーデたち若者の“自堕落さ”に注目したい。

他方、そんなベルリンだけではなく、ファビアンと同じ下宿に、ある日、女優を夢見る２５歳の女性コルネリア（ザスキア・ローゼンダール）が引っ越して来たからラッキー。作家を目指すファビアンと女優を夢見るコルネリアは瞬く間に恋に落ちていくことに・・・。

■□■この友人はすごい！遊ぶだけでなく勉強も社会活動も！■□■

本作の主人公はタイトルにされているファビアンだが、全編を通じて彼の（唯一の）友人ラブーデの存在感が強いので、彼にも注目！導入部で紹介されるラブーデのお屋敷の広さにはビックリ。彼は冷え切った関係にもかかわらず夫婦関係を解消しない両親を軽蔑して家には寄りつかず、金持ちの放蕩息子として自堕落な生活を送っていが、他方で彼はしっかり勉強をし、文学博士を目指して教授資格論文の完成に全力を傾注していたらしい。さらに、小説を書くことばかり夢見て、ラブーデと一緒に遊び呆けているファビアンが社会問題に何の関心も示さないのに対して、ラブーデの方はマルクス主義を信奉し、世界革命を夢見て現実の革命運動に身を投じていたから偉い。

しかし、しばらく後にヒトラーの抬頭を許してしまう不安定な１９３１年当時のドイツで、ラブーデが夢見た世界革命が実現するはずはない。ある日、ファビアンはラブーデの父親から、「デモでラブーデが逮捕され、釈放後に姿を消した」と聞かされたからビックリ。彼の情報集めに奔走することに。やっと見つけたラブーデは、芸術家を気取り、男に裏切られた女たち集めて娼婦として客を取らせている「男爵」と呼ばれるライター女史の元にいたが、世界革命の夢に敗れ、婚約者にも裏切られて絶望した彼は、男を信じない女たちに囲まれている瞬間だけ安らぎを感じているようだった。そんな彼に、大学から「論文失格」の手紙が届くと・・・。

もっとも、それは同級生の意地悪な悪戯心からでた偽りの手紙だったからアレレ・・・。自分の人生をかけて書き上げた論文に対して、そんな悪質な悪戯をするとは！そこから生まれてくる、ファビアン唯一最大の友人の悲劇は、あなた自身の目でしっかりと。

■□■不安な時代には、モルのようなしたたかな女も！■□■

五木寛之の『青春の門』では、福岡県の筑豊から上京し早稲田大学に入学した若き主人公、伊吹信介の周りに、彼の人格形成に影響を与えるさまざまな人物がいた。第２部「自立篇」では、大学の体育の教授でありながら、なぜか信介に個人的にボクシングを教え始める石井忠雄がその筆頭だが、他方では、娼婦ながら、美人できっぷの良い姉御肌の女・カオルが興味深い存在だった。

本作でそのカオルに匹敵する女（？）が、本作導入部でファビアンを怪しげな自分の家に引っ張り込む女、イレーネ・モルかもしれない。そのモルは、ファビアンがラブーデとの友情模様やコルネリアとの恋模様を展開している本作中盤にも突如登場してくるので、

それにも注目。夫であるモル博士は、妻と「妻が他人と深い関係になることを望む場合は夫に紹介すること」という契約を交わした上で、妻が酔いと色情に乱れる姿を楽しんでいたが、さすがにあの時のファビアンはそれには耐えられなかったらしい。しかして、今モル博士は横領の容疑でフランスに高飛びしたため、残された妻は若い男の子を集めて有閑マダム相手に男娼の館をやっているらしい。『青春の門』のカオルも相当したたかな女だったが、世界が大きく変わる予感と不安でいっぱいの１９３０年代のドイツで生きる女・モルはそれ以上にしたたかだ。そんなモルは失業で困窮している様子のファビアンに対して、自分の店で働かないかと誘いをかけたが、さてファビアンは？

■□■ファビアンとの恋を？女優の道を？女心の機微は？■□■

１７８分の本作で、若いフェビアン、ラブーデ、コルネリアの３人が最も幸せだったのは、ラブーデのお屋敷近くの湖で泳ぎ、射撃をして遊んだ一瞬だけ。それ以外はすべて３人が３人ともさまざまな試練を受け、もがき苦しんでいる姿になる。とりわけ、ラブーデが受ける運命の理不尽さと不幸な結末は前述の通りで哀れだ。

それでも、ファビアンとコルネリアの恋物語が順調に進めば、それなりに幸せがやってくるのかもしれないが、ある時、ファビアンはドレスデンからやってきた母親にコルネリアを紹介し、３人でレストランに入ったにもかかわらず、そこに大物監督のマーカルトとそのスタッフと共に入ってくると・・・？そんな偶然の“売り込み”が成功するケースは少ないはずだが、巧みな自己アピールによってマーカルトとそのスタッフの中に入っていったコルネリアは、その後フェビアンと母が待っているテーブルに戻ってくることはなかったから、ある意味でラッキー・・・。

しかして、マーカルトに気に入られたコルネリアは、この後ファビアンとの恋を選ぶの？それとも、マーカルトの懐に飛び込み、女優の道を選ぶの？その選択を迫られたコルネリアは、さて・・・？

■□■衝撃的なラストに注目！泳げないのになぜ！？■□■

成功を夢見て上京したものの、夢破れて故郷に戻ることに。立身出世物語とは全く逆のそんな物語も日本では多いが、本作のファビアンは、ドイツ版のそれだ。ラブーデの論文が不合格とされたことに猛抗議したものの、悲惨な結末は変わることはなかった。また、金はなくても愛さえあれば。そう思っていた恋も、結局、力のあるマーカルト監督を頼り、女優への現実的な路線に踏み込んだコルネリアと別れてしまうことに。その結果、傷心のファビアンは今ベルリンを離れ、故郷のドレスデンに戻っていたが、そこで見たのは、新進気鋭のスターとして雑誌を飾るコルネリアの姿だ。

今更連絡を取っても、コルネリアは無視してしまうのでは・・・？ファビアンはそんな不安でいっぱいだったが、夜を通して電話のもとでコルネリアからの連絡を待っていると、電話のベルが鳴ったからラッキー。そして、ファビアンは日曜日の４時、カフェ・シュパルテホルツでコルネリアとの再会を約束することに。アレレ、意外にも本作はそんなハッ

ピーエンドになるの？

　そう思っていると、本作は何とも衝撃的なラストが訪れるので、それに注目！ドミニク・グラフ監督が本作のサブタイトルにした「Going to the Dogs」は「破滅していく」という意味だが、そのサブタイトルにドミニク・グラフ監督が込めた意味は？また、本作では「風向きが変わった」という言葉が、人生に疲れた青年の遺書に現れるが、それってどういう意味？さらに、もう一つの劇中のいくつかのシーンに登場する宣伝ポスターに見える不吉な言葉が「水泳を習おう」だが、その意味は？近時、長谷川博己と綾瀬はるかが共演した『はい、泳げません』（２２年）と題する邦画が公開されており、同作でも「水泳を習おう」が１つのテーマにされているようだが、本作はそれとは違うはず。本作のそれは、本作ラストのシークエンスを見ながらじっくり考えたい。

２０２２（令和４）年６月２８日記